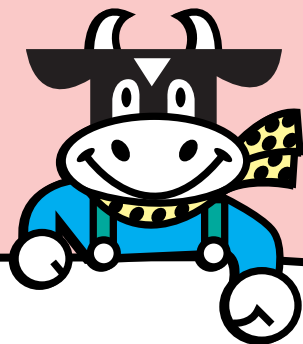




ワンポイント・アドバイス



かしのいい乳房炎注入薬の選択

今も昔も変わらないのは、乳房炎に悩まされること。
搾乳衛生等の技術が進んでいるにもかかわらず、相変わらず乳房炎は発生します。では発生してしまった乳房炎にどう対応するか。薬の選択について考えてみましょう。

まず何を今更にとおっしゃらずに。

細菌検査は必ず実施しましょう。乳房炎治療の第一歩は、原因菌同定と薬剤感受性検査のためのサンプリングです。細菌検査を実施し、敵の正体(原因菌)を知らなければ、攻撃の対策の立てようがありません。

さてサンプリングはしました。注入薬は何にしましょう。

「何にでもセファメジンQR」は、全く「かしくない」選択です。乳房炎は発症した。でも熱はない。食欲はある。元気だ。

い抗生物質はないのです。歴史上最古にして最強。それがペニシリン。ブドウ球菌やレンサ球菌に対する殺菌作用なら、セファソリンなど足元にも及びません。私は個人的にはペニシリンを「一点豪華主義」、セファソリンを「器用貧乏」と呼んでいます。

「何にでもセファメジンQR」がいけない理由も一つ。

細菌も生き物です。やられてばかりいるわけにはいきません。抗生物質に対抗する手段を身につけるようになります。これを「薬剤耐性」と呼びます。

広範囲の菌に効く薬剤を使用し続けると、数多くの細菌が、数多くの薬剤に対する耐性を獲得します。そしていずれは全ての抗生物質が効かない菌が出現します。

その代表が「MRSA」です。私達の領域にMRSAが出現するなど想像したくありませんが、今のままセファソリンを無制限に使用し続けると、案外その日は早くやって来てしまうかもしれません。

乳房炎からのMRSAの分離。それは、乳房炎に対して人間が敗北したことを意味するような気がします。

日本の医療分野における耐性菌の発生状況は、世界的に見て最悪のレベルにある。

ならばペニシリン(ハイボリス)です。なぜでしょうか。

体温や食欲に影響を与えない乳房炎の原因の9割以上はブドウ球菌かレンサ球菌によるものです。ブドウ球菌のうち、黄色ブドウ球菌は、ほとんどがペニシリンに感受性あり(有効)です。環境性ブドウ球菌は、ほぼ半分がペニシリンに感受性ありで、重症化、慢性化することはほとんどありません。レンサ球菌は、ほとんどがペニシリンに感受性ありです。ほら、十分ペニシリンで対応できます。熱はない。食欲はある。元気だ。このようなケース、まずはペニシリンのような守備範囲の狭い薬剤から使用を開始することが重要です。そしてこのケース、薬剤感受性を調べて、その後修正を行う時間的余裕があります。

「でも、セファメジンQRならばブドウ球菌にもレンサ球菌にも、大腸菌にだって効くじゃない。ならばセファメジンQRでいいのでは？」

ります。その原因が、広範囲の菌に効く抗生物質を根拠なく無制限に使用していた結果であることは間違いない事実です。医療団体は薬剤耐性菌の出現を、畜産分野での疾病予防や成長促進の目的で投与される抗生物質が原因であると主張しています。しかしそれは自分たちが誤った抗生物質の使用を繰り返して続けたこととの言い訳でしかありません。

医療現場での抗生物質の使われ方、情報がないや腹が立つやら、いろいろな逸話があるようですが、それは別の機会に。

薬剤感受性検査で、レンサ球菌の場合、時折ペニシリンが「E」の場合があります。「E」だと効かないのでは、と思われるかもしれませんが、ご安心を。乳房内注入のような局所投与では、薬剤の濃度が高いまま菌に対して作用します。そして前述のとおり、ペニシリンの殺菌作用は史上最強。レンサ球菌に対して乳房内注入薬を選択するならば、セファソリンの「S」よりもペニシリンの「E」の方が効果的です。

では熱がある時、元気や食欲がない時はどうしましょう。

獣医師の診療を受けて下さい。おそらく原因菌の同定ができるまでは、広範囲の菌に効く抗生物質を選択することにな

QRでしょ。それに何にでも効くんだからセファメジンQRが一番強い薬なのでは？」
残念ながら、ここに大きな誤解があります。そしてもっと残念なことは、多くの獣医師がこの誤解を誤解と思っていないことです。

誤解その1
「何にでも効く」イコール「抗菌作用が強い」は、大間違い
誤解その2
「新しい薬」イコール「抗菌作用が強い」は、大間違い

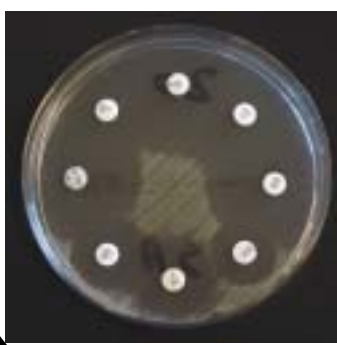
ペニシリンは歴史上最も古い抗生物質です。そして感受性のある菌も限られています。それに対し、セファソリン(セファメジンQR)は私達の領域では比較的新しい抗生物質です。そして幅広い菌に感受性があります。
ところが意外にも、21世紀となった現在でさえ、ペニシリンよりも殺菌力の強

るでしょう。ただし薬剤感受性検査の結果、ペニシリンが有効ならば、ペニシリンへの変更を躊躇してはいけません。

乳房炎に限らず、感染症の治療は、動物(牛)と、原因菌と、抗生物質の、三角形を描くことが重要です。三つのうちの一つでも欠けると効果的な治療は望めません。

そして、抗生物質は、原因菌に対して効くものであり、動物に対して効くものではありません。最終的に病気を治すのは、薬ではなく動物なのです。

適切な抗生物質の選択が、現在の乳房炎を早期治療に導き、将来の薬剤耐性菌の出現も抑制することになるでしょう。



細菌の薬剤感受性検査